

鳥 類

神奈川県内の鳥類については、多くの観察者が記録を報告しており、その種類相が明らかになってきている。記録をまとめた網羅的な文献としては、中村(1974, 1980)、日本野鳥の会神奈川支部(1986, 1992)などをあげることができる。また地域的な資料として、相模川河口鳥類研究グループ(1976, 1979, 1981, 1983, 1989)による相模川河口、相模原市教育研究所(1982)による相模原、平塚市博物館(1983)による平塚、室伏(1985, 1988)による西湘地区、高橋(1990)による藤沢、山口(1991)による丹沢、唐沢ほか(1993)による座間などの調査結果が順次報告され、分布に関する情報が蓄積されてきた。その結果、県内で1994年までに記録された鳥類は帰化逸出種を含めて63科394種であり、そのうち自然分布種は58科338種、帰化逸出種は17科56種となった。

自然分布種では、日本野鳥の会神奈川支部(1992)にあげられた334種に、サメビタキ(日本野鳥の会神奈川支部目録編集委員会, 1994)、ホシムクドリ(平沼, 1993)、ケアシノスリ(狛江市, 1992)が追加され、またここでは絶滅種であるカラスバト(中村, 1979)を含めた。また、帰化逸出種としては、日本野鳥の会神奈川支部(1992)にあげられた41種(アカツクシガモ、アカハシハジロ、コジュケイを含む)にクロトキ(小宮, 1985)、オオフラミンゴ(箱根町教育委員会, 1983)、ナキアヒル(柴田, 1962)、ウスユキバト、コザクラインコ(桑原, 1989)、キバタン(中村一恵, 未発表)、コウラウン(日本野鳥の会神奈川支部目録編集委員会, 1994)、アカハラコノハドリ(松崎, 1993)、チャキンチョウ(日本野鳥の会神奈川支部目録編集委員会, 1994)、カナリア(横須賀市自然博物館, 1990)、キマユカナリア(杉坂, 1992)、ズグロウロコハタオリ(松崎, 1995)、カバイロハッカ(下島, 1993)、ハイイロハッカ(中村, 1984)、キュウカンチョウ(日本野鳥の会神奈川支部, 1986)を追加した。

これらの種について、レッドデータ度、および地域別の分布一覧表を示した(表10)。鳥類の場合は、他の動物と違って渡りという習性を持つ種が多く、季節によって生息する種が異なるという現象がある。また、同じ種であっても繁殖期と非繁殖期では生息環境の条件の違いがあることが多い。そこで、レッドデータ度については、繁殖期と非繁殖期に分けて評価を行うこととした。原則として夏鳥は繁殖期、冬鳥と通過鳥は非繁殖期、留鳥については両者の評価を行った。

繁殖期については、平田(1994a)によると、県内で繁殖記録のある野生種は102種となっている。この中で、ノスリとヤマシギについては繁殖記録が1例しかなく、状況もよくつかめていないので、繁殖期のレッドデータ度の評価は行わなかった。アカモズ、チゴモズについても県内の繁殖記録はあるが、偶発的な可能性が高いので同様に評価を行わなかった。コジュケイは帰化種なので評価を行わなかった。コノハズクとツツドリについては、繁殖の確実な記録はないが、繁殖期において箱根や丹沢で記録されており、繁殖も十分に予想されるので評価の

対象とした。過去に箱根で繁殖していた可能性があるオオジギとコヨシキリについては、詳細が不明であるため、今回の繁殖期でのレッドデータ度の評価は行わなかった。カラスバトについては、かつて、東京湾の猿島に生息していたという記録(中村1979)があるが現在の生息に関する情報はまったく得られないので、絶滅種と評価した。

これらをまとめると、繁殖期の評価を行った種は100種となり、その内訳は、絶滅種1種、危惧種10種、減少種24種、健在種65種(希少種10種を含む)となった(表4, 総論117頁参照)。

非繁殖期については、越冬地もしくは渡りの中継地として県内の環境を継続的に利用していると思われる種について評価をした。コチョウゲンボウ、ノハラツグミ、ヤツガシラなどの希少渡来種や、チゴハヤブサ、ノゴマのように渡りの時期に定期的に記録があっても、特定の環境や地域と結びついていない種は評価を行わなかった。また、ミズナギドリ科、ウミツバメ科、海ガモ類、ハイイロヒレアシシギなどのように主たる生息環境が海上で、神奈川県という特定地域の環境変化の影響を受けることの少ない種についても評価は行わなかった。ただし、これらの海鳥も、タンカーなどからの原油の流失、プラスチック粒、ビニール、テグス糸などのゴミの投棄による海洋汚染の影響や、漁網にからまるといった被害を受けており、広い意味の人間活動の影響を大きく受けていることを明記しておく。

これらの選択の結果、非繁殖期としては、163種について評価をした。その内訳は、絶滅種1種、危惧種23種、減少種25種、健在種114種であった(表5)。

このように、繁殖期にも非繁殖期にも全体の約3分の1の種類が危惧種、減少種と位置づけられた。鳥類の減少や生息環境の悪化をもたらしている原因としては、大きく4つに分けて考えることができる。

一つめは、生息環境、特に繁殖環境の減少または、消滅である。京浜や三浦半島、大磯丘陵などの丘陵地では、宅地や研究所等の建設のための造成により、照葉樹林や雑木林が失われ、ミゾゴイ・コサメビタキ・サシバナなどの繁殖は危機的な状況に陥っている。河川敷のヨシ原や砂礫地で繁殖を行うヨシゴイ・コアシサシ・チドリ類は、釣り人の立ち入り、自動車やバイクの侵入、砂利採取、河川敷の過剰利用、ゴミの投棄などによって、繁殖活動ができなくなっており、コアシサシのように繁殖コロニーが大幅に減少している種もある。湿地についても同様であり、湿地性の種の重要な繁殖地であった水田も、乾田化、耕地整理、宅地開発等のために減少の一途をたどっている。ヒクイナ、タマシギなどがその影響を受けている。内陸部の水田や休耕田は、春秋の渡りの時期に、淡水域を好むシギ類の渡来地としても重要である。しかし、座間市新田宿等に見られるように、このような環境も著しく減少している。その背景には、農業政策や開発などとともなう農業人口の現象による水田の維持

管理が困難になってきているという最近の都市近郊農業の問題もかかわっている。渡りの中継地として、重要な役割を果たしている干潟は、かつては東京湾岸に広く存在していたが、埋め立てによりほとんど消滅してしまった。わずかに残された三浦半島や多摩川河口等の小規模な干潟がシギ・チドリ類の羽を休ませているに過ぎず、渡来する種も数も激減している。

二つめは、ゴミによる個体への影響である。干潟や海岸、河原では釣り針を飲み込んだり、それについているテグス糸が翼や脚にからみついて、傷ついたり命を落とす事故が絶えない。また、海鳥では、ビニールなどを餌と思って飲み込み、消化管をつまらせるケースも起こっている。さらに、ゴミがカラス類や野ネコ、野イヌ等に餌を提供し、それらの動物によって他の鳥類が捕食される間接的な影響も懸念される。また、神奈川県内での具体的な報告例は少ないが、農薬や鉛弾などによる環境汚染も鳥類に深刻な影響を及ぼしている。

三つめは、人間生活とのトラブルによる影響である。これは、悪臭・騒音・糞害等の人間の生活面への影響と、農産物への食害の問題である。サギ類の繁殖やねぐらのコロニーでは、300羽を越える程度の規模になると、周辺住民からの苦情が目立つようになる(飯村, 1985)。また、近年では住宅へのツバメ類の営巣を嫌う人たちがでてきている。川崎市の等々力緑地公園の釣り池や多摩川ではカワウが釣り魚や有用魚類を捕食してしまうことから、それを追い払う動きも出ている。三浦半島などでのヒヨドリによる野菜、キジバトやドバトによる豆類やトウモロコシなどの食害問題も大きな話題になっている。こうしたトラブルは利害関係が複雑で、容易に解決できる問題ではないが、人間が鳥を含む自然への接し方を考え直さなければならない時期にきていると考えられる。

四つめは、集団生息地の減少である。例えば、ねぐら環境として、城ヶ島のウミウ、ヒメウの集団ねぐらや相模川河川敷のツバメのねぐらや寒川町や伊勢原市のサギ類のねぐらなどがある。また、集団繁殖地として、相模川や酒匂川のコアジサシのコロニーや中原区や横須賀市や海老名市や小田原市にあるサギ類のコロニーがある。また、飛来地として、アオバトの来る大磯町やシギ、チドリ類の来る多摩川河口や相模川河口や座間市などがある。さらに、越冬地として、カモ類の来る芦ノ湖や相模原貯水池、ニュウナイスズメの来る小田原市などがある。これらの集団生息地は、もし、その環境がなくなれば、そこを利用する種にとっては住み家を失うことになり、集団ゆえにその影響はかなり大きなものがある。

神奈川県という一地域で鳥類の生息環境の改善がなされても、夏鳥が越冬する東南アジアの環境や、冬鳥が繁殖する北方の環境などが、保全されない限り、日本で見られる鳥は、減ることはあっても増えることはない。鳥類の保護は国際的な問題でもあることを最後に述べておきたい。

科の配列と学名は原則として山階(1986)によった。

アビ科 Gaviidae

県内から4種が記録された。

カイツブリ科 Podicipitidae

県内から5種が記録された。

アホウドリ科 Diomedidae

県内から2種が記録された。

最近、外洋性の鳥であるアホウドリなどの胃袋から、ビニルやプラスチック粒のゴミなどが発見される例がみられる(長谷川, 1990)。今後、海洋に散乱するゴミが、外洋性の鳥の生息に影響を及ぼすことは必至と思われる。

ミズナギドリ科 Procellariidae

県内から10種が記録された。

ウミツバメ科 Hydrobatidae

県内から5種が記録された。

ネッタイチョウ科 Phaethontidae

県内からアカオネッタイチョウ1種が記録された。

カツオドリ科 Sulidae

県内から2種が記録された。

ウ科 Phalacrocoracidae

県内から3種が記録され、ウミウ、ヒメウが非繁殖期の減少種と判断された。

△ウミウ *Phalacrocorax filamentosus* (Temminck et Schlegel)

[非繁殖期・減少種G]

冬鳥として渡来する。主に海岸に生息し、昼間の餌場と夜間のねぐらの間を往復しながら暮らしている。三浦市城ヶ島にある「集団ねぐら」は、全国的にみても規模の大きなものである。城ヶ島の赤羽根の断崖一帯は、ウ類の群棲地として県指定の天然記念物として保護されているが、保護状況は十分とは言えず、最盛期である1970年の2489羽(ウミウとヒメウの合計)に比べると現状では900羽前後(横須賀市自然博物館, 1991a)とかなり減少している。また、東京湾の猿島にも500羽前後(横須賀市自然博物館, 1991a)が渡来する。この他、真鶴半島の断崖もねぐらとして利用されている。

△ヒメウ *Phalacrocorax pelagicus* Pallas [非繁殖期・減少種G]

ウミウと同じように海岸付近に生息するが、数は少ない。ヒメウも冬鳥として渡来する。ねぐら等はウミウの群と共にすることが多い。城ヶ島の赤羽根の岩場はウミウと共に定期的な渡来地として知られており、200羽前後が生息している。ウミウ同様、以前に比べて減少している。

グンカンドリ科 Fregatidae

県内から2種が記録された。

サギ科 Ardeidae

県内から15種が記録され、クロサギ・ミゾゴイ・ヨシゴイの3種が繁殖期の危惧種、アマサギ・ササゴイ・ダイサギ・コサギ・ゴイサギの5種が減少種と判断された。

前者については、丘陵地の開発により繁殖環境が消失したり、河川改修や岩礁海岸などの繁殖環境への人間の侵入などが繁殖状況を悪化させている。後者については、海老名市や小田原市のように繁殖コロニーが人家付近にあるため悪臭・騒音・糞害等で周辺住民とのトラブルを起こし、そのために消滅した場所もある。

また、水田や湿地等の水生小動物の採餌場所が減少していることも心配である。

○クロサギ *Egretta sacra* (Gmelin) [繁殖期・危惧種D]

岩礁海岸に生息する留鳥。三浦市城ヶ島と真鶴半島で繁殖記録があり、太平洋岸における分布の北限に近い個体群である。生息数も少なく、繁殖は岩場の窪み等で行われる。磯釣り客等の増加に伴い、繁殖環境である岩場への人間の干渉が増大し、繁殖への影響が懸念される。

○ミゾゴイ *Gorsakius gousagi* (Temminck)

[繁殖期・危惧種E]

県下の丘陵地に初夏に渡来し、繁殖をする夏鳥だが、最近では、繁殖の情報を聞くことがない。1960年頃には鎌倉で、1976年には津久井で繁殖記録があった。最近では、朝比奈(1994)によると寒川町の平地林で数年前まで繁殖していたという。しかし、繁殖環境となる沢や湿地のある林の減少が著しくなり、4月下旬に渡り途中の個体が夜間にポォー・ポォーと言う独特な声で鳴くのが稀に聞かれるだけになってきている。

○ヨシゴイ *Ixobrychus sinensis* (Gmelin) [繁殖期・危惧種E]

水田や河川の水辺に生息する夏鳥。繁殖については、1982年に平塚市相模川で確認されたものしかなく、動向がつかめていない。5月頃に、小河川においても稀に成鳥を観察することがあるので、可能性がないわけではない。しかし、河川改修による生息環境の消失や河川敷へのレジャー客の侵入により、繁殖環境は著しく悪化している。8月過ぎになると、水田や河川でも幼鳥タイプを見かけることがあるが、県内で繁殖したものであるかは判断が難しい。

△ササゴイ *Butorides striatus* (Linnaeus) [繁殖期・減少種G]

河川で魚を主として餌にして生息する夏鳥。他のサギ類とは異なり、この種だけでコロニーを形成する。県内では、相模川や酒匂川等の大きな河川の周辺に小規模なコロニーを形成する。厚木市内の社寺林のコロニーは、今でも小規模ながら存続しているが、座間市のコロニーは1988年以降、消滅している可能性が高い。

△アマサギ *Bubulcus ibis* (Linnaeus)・ダイサギ *Egretta alba* (Linnaeus)・コサギ *Egretta garzetta* (Linnaeus)・ゴイサギ *Nycticorax nycticorax* (Linnaeus)

[以上、繁殖期・減少種G]

いずれも、水田や河川のような環境で水生生物を餌として生息している。アマサギは夏鳥、ダイサギも夏鳥(越冬に渡来する別の亜種もある)である。コサギ、ゴイサギは留鳥である。4種とも繁殖コロニーを共有しながら繁殖活動を行う。現在では、県下のコロニーは10カ所に満たず、中原区等々力、伊勢原市、寒川町、開成町などに、コロニーがあり、それぞれ数種が繁殖を行っている(朝比奈1994)。寒川町のコロニーは県内で唯一戦前から続いているコロニーである。いずれも、この数年は比較的安定して繁殖が行われている。しかしながら、横須賀市や海老名市の一部では、餌場や営巣環境の消滅や地域住民とのトラブルにより消滅したコロニーもある。酒匂川流域のコロニーは安定せず、継続的に繁殖ができていない。

コウノトリ科 Ciconiidae

県内からナベコウ1種が記録された。

トキ科 Threskiornithidae

県内から2種が記録された(帰化逸出種のクロトキは、多摩動物園での飼育個体である)。

フラミンゴ科 Phoenicopteridae

県内から帰化逸出種のオオフラミンゴ1種が記録された。

カモ科 Anatidae

県内から帰化逸出種5種を含む37種が記録されており、オシドリが繁殖期の希少種に判断された。

▲オシドリ *Aix galericulata* (Linnaeus)

[繁殖期・希少種I*]

山地の川や湖等の水辺に生息する冬鳥。一部留鳥。1980年に箱根で繁殖が確認されているが、数も少なく、繁殖場所が局地的であるため、今後の動向に注意する必要がある。

タカ科 Accipitridae

県内からは16種が記録され、繁殖期において、サシバ・トビが減少種に、オオタカ・ツミ・ハイタカ・クマタカが希少種と判断された。ハイタカ・サシバ・オオタカは丘陵地を主な繁殖環境としているが、それらは、近年の宅地・ゴルフ場等の開発により急激に減少している。

△サシバ *Butastur indicus* (Gmelin) [繁殖期・減少種G]

丘陵地の雑木林に生息し、谷戸の生物相の頂点に立つ夏鳥。近年、多摩丘陵・三浦半島・津久井・平塚などで記録がある。しかしながら、丘陵地のゴルフ場や宅地・工場用地などによる開発で、繁殖例は減少してきている。三浦半島では、餌場である谷戸の荒廃や開発、営巣地である丘陵地の宅地や道路の開発によって、この20年の間に激減している。

△トビ *Milvus migrans* (Boddaert) [繁殖期・減少種H]

海岸から河川にかけて生息する留鳥。横浜南部、鎌倉、横須賀、葉山、三浦などの三浦半島周辺や、相模川周辺の湘南地域等での記録はあるが、以前に比べると減少しており、特に繁殖の記録は少ない。

▲オオタカ *Accipiter gentilis* (Linnaeus)

[繁殖期・希少種I*]

開けた森林に生息する留鳥。平塚や厚木での繁殖が報道されたが、数は少なく環境の変化を受けやすく継続的な繁殖活動も難しい。

▲ツミ *Accipiter gularis* (Temminck et Schlegel)

[繁殖期・希少種I*]

森林に生息する夏鳥だが、最近では相模原、大和、座間など市街地での繁殖が目につくが、継続的な繁殖活動はあまり見られない。丹沢などでも繁殖記録はあるが、全体的に、数は少ない。

▲ハイタカ *Accipiter nisus* (Linnaeus)

[繁殖期・希少種I*]

やや密生した森林に生息する留鳥で数が少ない。繁殖記録は、1984年緑区で繁殖途中で放棄した例があるだけ。ハイタカの営巣は、樹齢20～25年程度の密生した林が必要と言われている(植田ほか1991)。

▲クマタカ *Spizaetus nipalensis* (Hodgson)

[繁殖期・希少種I*]

開けた山地に生息する留鳥。丹沢山中札掛での繁殖は、1978年に中村氏によって確認されて以来、1985年まで継続していたが、その後、繁殖活動は行われていたが、いずれも失敗に終わっている。個体数は少なく、生息環境の変化によっては、生存も危ぶまれる。

ハヤブサ科 *Falconidae*

県内から4種が記録された。

キジ科 *Phasianidae*

県内から、帰化逸出種4種を含む7種が記録され、ヤマドリが繁殖期の減少種に、ウズラが非繁殖期の減少種に判断された。

△ヤマドリ *Phasianus soemmerringii* Temminck

[繁殖期・減少種G]

山地の林床に生息する留鳥。逗子、愛川、丹沢等で記録があるが、観察機会は少なく、狩猟圧等により、数は減少している。

△ウズラ *Coturnix coturnix* (Linnaeus) [非繁殖期・減少種H]

冬鳥として渡来し、河川敷や農耕地のような開けた環境で藪のあるような所に生息するが、数は少ない。最近では、観察記録も少なく、越冬期に河川敷等で稀に観察記録がある程度である。狩猟圧の影響も考えられる。

クイナ科 *Rallidae*

県内から帰化逸出種1種を含む9種類が記録され、ヒクイナが繁殖期の危惧種、バンが減少種と判断された。共に、湿田の改良や宅地等の開発による湿地の減少が生息環境の減少を招いた。

○ヒクイナ *Porzana fusca* (Linnaeus) [繁殖期・危惧種E]

水田や河川等の湿地に生息する夏鳥。以前は、繁殖期になると水田や湿地で鳴き声がよく聞かれた。愛川町では、1980年代前半頃までは、数番が見られたが、湿田改良により、湿地が減少し、見るができなくなっている(竹内裕氏私信)。最近では、土地改良・開発による湿地の減少が、個体種の減少を招き、繁殖記録も相模川中流や平塚である程度で、今後の存続が危ぶまれている。

△バン *Gallinula chloropus* (Linnaeus) [繁殖期・減少種H]

水田や河川等の湿地に生息する夏鳥。この種も、河川や水田等の湿地を繁殖環境にしており、湿地の減少により、数も減ってきている。最近では、相模川流域の水田地帯等で繁殖が記録されている。また、横浜では菊名池等の都市公園の池での繁殖記録もある。

タマシギ科 *Rostratulidae*,

県内から1種が記録され、タマシギが繁殖期の危惧種と判断された。

○タマシギ *Rostratula benghalensis* (Linnaeus)

[繁殖期・危惧種F]

留鳥として水田や水辺などの湿地に生息する。以前は、箱根の仙石原でも記録されていたが、今では、観察することさえできない。横浜でも、小机周辺の記録があったが、今では絶滅に近い。最近では、三浦市、藤沢市、相模川流域の海老名、座間、平塚、伊勢原等での繁殖が記録されているが、この種も湿地の減少により、存続が危ぶまれている。

ミヤコドリ科 *Haematopodidae*

県内からミヤコドリ1種が記録された。

チドリ科 *Charadriidae*

県内から11種が記録され、シロチドリが繁殖期における危惧種、コチドリとイカルチドリが減少種と判断され、オオメダイチドリとダイゼンが非繁殖期における危惧種、シロチドリ、ケリ、タゲリ、メダイチドリ、ムナグロの5種が減少種と判断された。シロチドリは繁殖期・非繁殖期ともに危惧種と判断された。

チドリ類は、コアジサシと同様に河川敷の砂礫地が、その繁殖環境となる。近年これらの環境は、開発や人の侵入により、繁殖を続けることは危機的な状況になってきている。

○シロチドリ *Charadrius alexandrinus* Linnaeus

[繁殖期・危惧種E, 非繁殖期・減少種G]

海岸から河川にかけて生息する。現在は、相模川・酒

匂川の中流域で繁殖が記録されているが、減少している。
また、越冬期の海岸や河川的环境も人の出入り等により、生息環境が安定せず、数は減少している。

△コチドリ *Charadrius dubius* Scopoli

[繁殖期・減少種G]

夏鳥として渡来し、河川の砂礫地や造成地等で繁殖する。多摩川・相模川・酒匂川及びその周辺や三浦半島、藤沢などでの繁殖記録があるが、繁殖環境の減少や人的な外圧による繁殖放棄などにより、以前に比べ減少している。

△イカルチドリ *Charadrius placidus* J. E. et G. R. Gray

[繁殖期・減少種G]

主に河川周辺で生息する留鳥。相模川、酒匂川付近の河川で繁殖記録はあるが、河川環境の悪化とレジャー客等の人の出入りにより、抱卵、育雛など繁殖にかかわる行動を放棄してしまう例が後を絶たない。

○オオメダイチドリ *Charadrius leschenaultii* Lesson

[非繁殖期・危急種D]

旅鳥として、不定期に、三浦市江奈湾周辺、多摩川・相模川両河口に記録される程度である。以前に比べ、数が減少しており、観察機会も減ってきている。

○ダイゼン *Pluvialis squatarola* (Linnaeus)

[非繁殖期・危急種F]

海岸から河口干潟に渡来する旅鳥。以前は、三浦半島や相模川流域等にも見られたが、最近では、多摩川、相模川の河口域や湘南海岸等で観察される程度である。干潟等の状況が悪化し、数が激減している。

△ケリ *Microsarcops cinereus* (Blyth) [非繁殖期・減少種G]

現在では、藤沢、相模川・酒匂川周辺の休耕田等の水辺に春夏の渡りの時期に渡来するが、数も減少している。1970年代には、冬季、三浦や戸塚などに越冬していた例もあったが、最近では、茅ヶ崎や酒匂川周辺で記録される程度である。群れで見るとはほとんどない。

△タゲリ *Vanellus vanellus* (Linnaeus)

[非繁殖期・減少種G]

湿田等の湿地に主に渡来する冬鳥。茅ヶ崎や三浦には定期的な越冬地があったが、現在では、不安定であり、確実な越冬場所というのはほとんどない。寒川町岡田の越冬地は水田の埋め立て等により最近では渡来していない。

△メダイチドリ *Charadrius mongolus* Pallas

[非繁殖期・減少種H]

海岸から河口干潟に渡来する旅鳥。多摩川、相模川両河口、三浦半島、湘南海岸などで見られるが数は少ない。以前に比べると内陸部での記録は皆無になり、分布状況は縮小しており、数も減っている。

△ムナグロ *Pluvialis dominica* (Muller)

[非繁殖期・減少種H]

干潟や内陸部の水田や休耕田やその周辺の畑等に渡来する旅鳥。水田や休耕田等の減少により全体的な数は減っている。

シギ科 Scolopacidae

県内からは、40種が記録され、イソシギが繁殖期の減少種として判断された。また、サルハマシギ・コオバシギ・アカアシシギ・コアオアシシギ・ダイシャクシギ・ホウロクシギ・オバシギ・キリアイ・ヒバリシギ・オジロトウネン・アメリカウズラシギ・ウズラシギ・エリマキシギ・ツルシギ・オグロシギ・オオソリハシシギ・オオジシギの17種が非繁殖期の危惧種として、またキョウジョシギ・トウネン・ミユビシギ・アオアシシギ・クサシギ・タカブシギ・ソリハシシギ・チュウシャクシギ・ヤマシギ・ハマシギ・キアシシギ・タシギの12種が減少種と判断された。

渡りの途中に立ち寄る種で、県内で観察できる期間は短い長距離の渡りのエネルギー補給地として、県内の湿地も重要な役割を持っている。

非繁殖期において、ヤマシギを除く種は、その多くが淡水域を好むシギであるため、4-5月、8-9月の渡りのシーズンに内陸部における水田や休耕田の開水面がその休息地としての役割を果たしている。しかし、近年、農業政策と土地開発のために水田の減少が目立ち、座間市の新田宿のような渡来地でもシギ類が大きく減少している(竹内, 1993)。

また、相模川河口への渡来も1980年頃に比べると種類数も総数も激減している。

干潟のシギ類は、以前は、河口や干潟への渡来が主であったが、開発により、干潟が減少し、河川においても釣り客やレジャー客等の人の侵入により、休息地を奪われている。一時、鶴見区の大黒埠頭や金沢区の沿岸部の埋め立て造成地のような場所では、かなりの渡来が見られた。千葉県谷津干潟のように、シギ類の休息地の環境を整備することにより、ある程度の生息を維持することが考えられる。

現在残っている三浦半島の江奈湾などの干潟を含め、保全を考えていかなければならない。

非繁殖期のシギ類のコメントについては、ヤマシギを除いて渡来環境が似通っているため、評価ランクごとにまとめて行った。

○イソシギ *Tringa hypoleucos* Linnaeus

[繁殖期・危惧種G]

河川等の水辺で生息する留鳥。この種は、河川敷を営巣場所にしているため、チドリ類やコアジサシのように、近年、人の立ち入りにより繁殖のための環境が著しく減少しており、前途が危ぶまれている。

○サルハマシギ *Calidris ferruginea* (Pontoppidan)・コオバシギ *Calidris canutus* (Linnaeus)・アカアシシギ *Tringa totanus* (Linnaeus)・コアオアシシギ *Tringa stagnatilis*

(Bechstein)・ダイシャクシギ *Numenius arquata*
(Linnaeus)・ホウロクシギ *Numenius madagascariensis*
(Linnaeus)

〔以上、非繁殖期・危惧種D〕

○オバシギ *Calidris tenuirostris* (Horsfield)・キリアイ
Limicola falcinellus (Pontoppidan)

〔以上、非繁殖期・危惧種E〕

○ヒバリシギ *Calidris minutilla* (Vieillot)・オジロトウネン
Calidris temminckii (Leisler)・アメリカウズラシギ *Calidris*
melanotos (Vieillot)・ウズラシギ *Calidris acuminata*
(Horsfield)・エリマキシギ *Philomachus pugnax*
(Linnaeus)・ツルシギ *Tringa erythropus* (Pallas)・オグ
ロシギ *Limosa limosa* (Linnaeus)・オオソリハシシギ
Limosa lapponica (Linnaeus)・オオジシギ *Gallinago*
hardwickii (Gray)

〔以上、非繁殖期・危惧種F〕

旅鳥として、多摩川や相模川の河口干潟や三浦半島の
干潟や内陸の休耕田等の泥湿地状の環境に渡来するが、
観察機会は激減し、安定した渡来が見られなくなってき
ている。たとえ、観察機会に恵まれても種類も数も少な
い。酒匂川周辺の渡来地では、種類も数も激減している。
△キョウジョシギ *Arenaria interpres* (Linnaeus)・トウネ
ン *Calidris ruficollis* (Pallas)・ミコビシギ *Crocethia alba*
(Pallas)・アオアシシギ *Tringa nebularia* (Gunnerus)・クサ
シギ *Tringa ochropus* Linnaeus・タカブシギ *Tringa*
glareola Linnaeus・ソリハシシギ *Xenus cinereus*
(Guldenstadt)・チュウシャクシギ *Numenius phaeopus*
(Linnaeus)

〔以上、非繁殖期・減少種G〕

△ハマシギ *Calidris alpina* (Linnaeus)・キアシシギ *Tringa*
brevipes (Vieillot)・タシギ *Gallinago gallinago* (Linnaeus)

〔非繁殖期・減少種H〕

旅鳥として、春・秋に干潟や相模川や酒匂川流域の内
陸部の休耕田等の湿地に渡来する。サルハマシギ等と同
様の事情があるが、やや個体数が多く、減少の程度は少
ない。しかし、餌場としての泥湿地の確保が十分にとれ
ないと今後の減少は避けられない。

△ヤマシギ *Scolopax rusticola* Linnaeus

〔非繁殖期・減少種G〕

冬鳥として低地の林周辺に渡来する。夜行性のため、
昼間は、草陰や藪等でじっとしていることが多い。狩猟
圧の影響もあり、減少している。

ヒレアシシギ科 Phalaropodidae

県内から2種が記録されているが、アカエリヒレアシ
シギが非繁殖期の危惧種と判断された。

○アカエリヒレアシシギ *Phalaropus lobatus* (Linnaeus)

〔非繁殖期・危惧種E〕

シギ科の鳥と同じように、春秋の渡りの中継地の減少
や環境の悪化によって、見られなくなってきている。

セイタカシギ科 Recurvirostridae

県内から3種が記録された。

ツバメチドリ科 Glareolidae

県内からツバメチドリ1種が記録された。

トウゾクカモメ科 Stercorariidae

県内から4種が記録された。

カモメ科 Laridae

県内から22種が記録され、コアシサシが繁殖期の危惧
種と判断された。

○コアシサシ *Sterna albifrons* Pallas [繁殖期・危惧種F]

コアシサシは初夏に日本に渡来し、河川敷等の砂礫地
で繁殖をする夏鳥である。本種は国際・国内希少野生動
植物種に指定されており、国際的に保護の必要性が高
まっている。県下では、相模川・酒匂川の両河川敷のい
くつかのコロニーが知られている。近年、河川敷への、
人の出入り(車・バイク・釣り等)や、開発や砂利採取等
により、厚木市の小田急線下流部や中津川との合流部な
どのコロニーは消滅してしまった。現在のコロニーで比
較的大きなものは、相模川では、海老名市中野付近の中
州のコロニーがある。この場所は、周囲が川で囲まれて
いるため、釣り人以外は、障害になるものは少ない。し
かし、野犬やカラスがいるので安心はできない。また、
酒匂川では、飯泉の取水堰下流の企業庁の管理地の
中州が知られている。この場所は、立ち入り禁止区域な
ので、人的障害は少ないと思われる。しかしながら、台
風時の増水により繁殖の成功率は低い。また、適正な繁
殖環境(植生の被度5%以下)が維持されないとコロニー
が消失する恐れもある。

東京湾の臨海部の造成地では、繁殖環境としては十分
であり、人の出入りも禁止しているため、造成中(1~2
年)に限って、安全な繁殖ができるとの報告もある(金井
ほか、1991)が、県内についての状況は明らかでない。

ウミスズメ科 Alcidae

県内から7種が記録された。

ハト科 Columbidae

県内から帰化逸出種2種を含む5種が記録され、カス
バトが絶滅種として判断された。

●カラスバト *Columba janthina* Temminck [繁殖期・
絶滅種A, 非繁殖期・絶滅種A]

本種は、南日本沿岸の主に島嶼に固有の、純粋に森林
性の鳥で、常緑広葉樹林の天然林と強く結びついた種類
である。県下においても、東京湾の猿島は、うっそうと
したタブノキ林で覆われ、カラスバトも留鳥として生息
していたものと思われる。猿島でのカラスバトに関する
記録は、ブラキストンとプライヤーが1882年にその著書
『日本の鳥』の中でふれている。中村(1979)は、1847年の
江戸湾防備のための台場の建造が、この島の森林を伐採
し、それがカラスバトに致命的な影響を与えたものと推
察している。

オウム科 Cacatuidae

県内から帰化逸出種の2種が記録された。

インコ科 Psittacidae

県内から帰化逸出種の9種が記録された。

カッコウ科 Cuculidae

県内から4種が記録された。この仲間は托卵という繁殖生態をとるので、その存続は、それぞれの托卵相手の鳥の繁殖状況の如何にかかわる。

フクロウ科 Strigidae

県内から6種が記録され、コノハズクが繁殖期において危惧種に、アオバズク・フクロウが減少種、非繁殖期においてトラフズク・コミミズクが危惧種に、フクロウが減少種に判断された。

○コノハズク *Otus scops* (Linnaeus) [繁殖期・危惧種E]

夏鳥として箱根や丹沢の山地に渡来する。繁殖期には独特の鳴き声によってその生息を知ることができる。最近では、その声も聞かれる機会が減少してきている。

△アオバズク *Ninox scutulata* (Raffles)

[繁殖期・減少種H]

初夏に夏鳥としてうっそうとした社寺林等に渡来する。以前は、街中の社寺林の大木の洞などでよく営巣が記録されていたが、近年は、そのような環境がかなり少なくなり、繁殖例も減少している。藤野町では、橋桁の穴に営巣した例があり、巣箱等を含む人工物の利用も見られようになってきている。

△フクロウ *Strix uralensis* Pallas

[繁殖期・減少種H、非繁殖期・減少種H]

ある程度の規模を持つ林が開発等で減少し、以前に比べて生息環境が悪化している。また、営巣に適した大きな洞を持つ大木が次々と消えていくことも個体数の減少を早めているようだ。最近では、営巣場所の減少から、巣箱や地上に営巣する例(神奈川新聞, 1994)も見られるようになってきている。

○トラフズク *Asio otus* (Linnaeus)

[非繁殖期・危惧種D]

冬鳥として、多摩川、相模川等の大きな河川の周辺に稀に渡来する。昼間は、川周辺の森や竹藪等に身を潜め、夜間に河川でネズミ等を捕らえる生活をしている。近年、河川改修に伴い、ねぐらの森や餌場の河川数などが失われ、減少している。

○コミミズク *Asio flammeus* (Linnaeus)

[非繁殖期・危惧種D]

冬鳥として渡来する。大きな河川の周辺や広い草地等でネズミを餌として生息する。多摩川では、毎年のように越冬個体が見られたが、最近では、稀になってきている。相模川や小田原周辺でも記録はあるが、稀である。

ヨタカ科 Caprimulgidae

県内から1種が記録され、ヨタカが繁殖期の減少種と判断された。

△ヨタカ *Caprimulgus indicus* Latham [繁殖期・減少種G]

夏鳥として、丹沢・箱根周辺の若い人工林や伐採後の低木林などの開けた環境に渡来するが、数は少ない。繁殖は丹沢で記録されているに過ぎず、夜間の独特な鳴き声も聞かれる機会が減少している。

アマツバメ科 Apodidae

県内から3種が記録された。

カワセミ科 Alcedinidae

県内から3種が記録され、アカショウビンが繁殖期の希少種と判断された。

▲アカショウビン *Halcyon coromanda* (Latham)

[繁殖期・希少種I*]

夏鳥として丹沢や箱根の山間部に渡来する。県内では津久井で繁殖が確認されているに過ぎない。分布は局地的であり、渡来状況も安定していない。数も観察機会も少ない。

ブッポウソウ科 Coraciidae

県内から1種が記録され、ブッポウソウが繁殖期の危惧種と判断された。

○ブッポウソウ *Eurystomus orientalis* (Linnaeus)

[繁殖期・危惧種D]

夏鳥として渡来し、主に津久井地域で観察される。大木の樹洞等に営巣するが、ムクドリに邪魔されて繁殖しないこともある。近年、大木の減少により営巣場所も不足し、橋桁の穴等で繁殖する例も見られる。しかし、繁殖状況は安定していない。

ヤツガシラ科 Upupidae

県内からヤツガシラ1種が記録された。

キツツキ科 Picidae

県内から5種が記録され、オオアカゲラが希少種と判断された。

▲オオアカゲラ *Dendrocopos leucotos* (Bechstein)

[繁殖期・希少種I*]

留鳥として丹沢に生息する。ブナ林を営巣環境とするが数は少ない。以前は箱根でも記録されていたが、現在では丹沢のみの生息である。

ヤイロチョウ科 Pittiidae

県内からヤイロチョウ1種が記録された。

ヒバリ科 Alaudidae

県内から3種が記録されており、ヒバリが繁殖期・非

繁殖期ともに減少種と判断された。

△ヒバリ *Alauda arvensis* Linnaeus

〔繁殖期・減少種H, 非繁殖期・減少種H〕

留鳥として県下一円に生息するが、生息環境の宅地開発等による農地の減少により分布域が少なくなっている。危機感を抱く人は少ないが、農地は確実に減少しているため、いずれは見られなくなる地域が増加する。また、水田等での営巣は、耕起により放棄されてしまうことがある。

ツバメ科 *Hirundinidae*

県内から4種が記録され、コシアカツバメが繁殖期の減少種と判断された。

△コシアカツバメ *Hirundo daurica* Linnaeus

〔繁殖期・減少種H〕

夏鳥として渡来し、市街地の古い家並などに営巣していたが、近年、家屋の改築等により、営巣環境を追われ、高層住宅等のベランダや踊り場の壁等に営巣することが目立つ。しかし、スズメ等の妨害により繁殖が放棄される例もある。また、住宅では営巣を嫌われることもある。他のツバメ類に比べると確実に減少している。

セキレイ科 *Motacillidae*

県内から7種が記録された。

サンショウクイ科 *Campephagidae*

県内から1種が記録され、サンショウクイが繁殖期の減少種と判断された。

△サンショウクイ *Pericrocotus divaricatus* (Raffles)

〔繁殖期・減少種G〕

夏鳥として丘陵地の雑木林に渡来する。分布は局地的であり、繁殖例も少ない。丘陵地の開発による繁殖環境の減少により数も観察機会も減っている。

ヒヨドリ科 *Pycnonotidae*

県内から帰化逸出種1種を含む2種が記録された。

コノハドリ科 *Irenidae*

県内から帰化逸出種のアカハラコノハドリが1種記録された。

モズ科 *Laniidae*

県内から3種が記録されているが、アカモズ・チゴモズについては、県下での繁殖状況は偶発的な可能性が高く、また生息状況も不明な点が多いため評価を控えた。

レンジャク科 *Bombycillidae*

県内から2種が記録された。いずれも不定期な渡来状況であるが、大磯のエノキ並木等に渡来することもあり、食餌木になるエノキ等の大木を保存していくことが必要と思われる。

カワガラス科 *Cinclidae*

県内からカワガラス1種が記録された。

ミソサザイ科 *Troglodytidae*

県内からミソサザイ1種が記録された。

イワヒバリ科 *Prunellidae*

県内から2種が記録された。

チメドリ科 *Timallidae*

県内から帰化逸出種の4種が記録された。

ヒタキ科 *Muscicapidae*

県内から37種が記録され、コサメビタキが繁殖期の危惧種、ヤブサメ・オオヨシキリ・セッカ・オオルリ・サンコウチョウの5種が減少種、キクイタダキが希少種、また、セッカが非繁殖期の減少種と判断された。

○コサメビタキ *Muscicapa latirostris* Raffles

〔繁殖期・危惧種E〕

夏鳥として丘陵地の雑木林に渡来する。以前は県内でも繁殖期の観察機会は十分あったが、(最近では)激減している。最近では津久井での繁殖記録がある。

△ヤブサメ *Cettia squameiceps* (Swinhoe)

〔繁殖期・減少種H〕

夏鳥として丘陵地から中腹にかけて渡来する。独特な囀りで生息は確認できるが、姿を見ることは稀である。三浦半島、高麗山、丹沢、箱根に分布する。生息環境の減少により、数は減っている。

△オオヨシキリ *Acrocephalus arundinaceus* (Linnaeus)

〔繁殖期・減少種H〕

夏鳥として河川や湿地のヨシ原に渡来し、繁殖をする。多摩川、相模川周辺の湿地および、三浦半島、藤沢、箱根の仙石原等で繁殖している。最近、河川・湿地環境の悪化によりヨシ原が消えていくのが減少に拍車をかけている。

△セッカ *Cisticola juncidis* (Rafinesque)

〔繁殖期・減少種H, 非繁殖期・減少種H〕

留鳥として水田・湿地地帯に生息し、繁殖をする。多摩川、相模川、酒匂川周辺の湿地に分布する。生息環境の水田等の減少により、数も減っている。

△オオルリ *Cyanoptila cyanomelana* (Temminck)

〔繁殖期・減少種H〕

夏鳥として山地に渡来し、沢沿いの崖等に営巣する。三浦半島や高麗山、丹沢・箱根の低山部等に分布する。近年、生息環境の減少に伴い数が減っている。声も姿も美しいので密猟の対象となっていることも減少の一因となっている。

△サンコウチョウ *Terpsiphone atrocaudata* (Eyton)

[繁殖期・減少種H]

夏鳥として、丘陵地に渡来し、植林地等の暗い林に営巣する。三浦半島の丘陵地、相模川流域の平地林、丹沢・箱根周辺の丘陵地などに分布する。近年、囀りを聞く機会がめっきりと減った種である。

▲キクイタダキ *Regulus regulus* (Linnaeus)

[繁殖期・希少種I*]

山地に生息し、針葉樹の林で営巣する。大山と丹沢で繁殖が記録されている。繁殖期での数は少ない。

エナガ科 *Aegithalidae*

県内からエナガ1種が記録された。

ツリスガラ科 *Remizidae*

県内からツリスガラ1種が記録された。

シジュウカラ科 *Paridae*

県内から4種が記録された。

ゴジュウカラ科 *Sittidae*

県内からゴジュウカラ1種が記録された。

キバシリ科 *Certhiidae*

県内からキバシリ1種が記録された。

メジロ科 *Zosteropidae*

県内からメジロ1種が記録された。

ホオジロ科 *Emberizidae*

県内から帰化逸出種3種を含む14種が記録され、ホオアカが繁殖期の減少種、ノジコ、アオジが希少種、オオジュリンが非繁殖期の減少種と判断された。

△ホオアカ *Emberiza fucata* Pallas

[繁殖期・減少種H]

県内では、一般的には冬鳥であるが山地の箱根と低地の愛川町と相模川中流域で繁殖が観察されている。しかし、繁殖状況は安定しておらず、数も少ない。

▲ノジコ *Emberiza sulphurata* Temminck et Schlegel

[繁殖期・希少種I*]

夏鳥として山地に渡来する。県内では局地的に箱根だけに見られ、数は少ない。繁殖は確認されているが、詳細な分布や生態は不明である。

▲アオジ *Emberiza spodocephala* Pallas

[繁殖期・希少種I*]

県内では、一般的には冬鳥であるが、箱根で繁殖するものがある。ただし、数は少ない。

△オオジュリン *Emberiza schoeniclus* (Linnaeus)

[非繁殖期・減少種G]

冬鳥として河川周辺や湿地のヨシ原に渡来する。ヨシ

の葉鞘に潜むカイガラムシを捕食するためヨシ原に依存する率が高い。多摩川・相模川周辺および三浦での記録がある。水辺環境の開発等の悪化によりヨシ原が減少しており、数も減少し、分布もせばめられている。

アトリ科 *Fringillidae*

県内から帰化逸出種2種を含む13種が記録された。

カエデチョウ科 *Estrildidae*

県内から帰化逸出種の6種が記録された。

ハタオリドリ科 *Proceidae*

県内から帰化逸出種6種を含む8種が記録され、ニュウナイスズメが越冬期の危惧種に判断された。

○ニュウナイスズメ *Passer rutilans* (Temminck)

[非繁殖期・危惧種D]

県内には冬鳥として渡来するが、分布が局地的である。県内唯一の定期的な渡来地であった南足柄市塚原や小田原市栢山での数が減少している。水田地帯の開発が影響しているようだ。

ムクドリ科 *Sturnidae*

県内から帰化逸出種5種を含む9種が記録された。

カラス科 *Corvidae*

県内から帰化逸出種1種を含む6種が記録された。

文献

- 朝比奈邦路, 1994. 鷺たちの住宅事情1994年版. Urban Birds, 11 (1): 23-38, 都市鳥研究会.
- 箱根町教育委員会, 1987. 野山のたより総集号. 205 pp.
- 浜口哲一, 1981. 相模川下流の鳥類相. 自然と文化, (4): 1-16, 平塚市博物館.
- 長谷川博, 1990. 渡り鳥地球をゆく. 岩波ジュニア新書. 202 pp.
- 林宏・岡田徹, 1992. わが国におけるコアジサシ *Sterna albifrons* の繁殖状況. Strix, 11: 157-168.
- 平沼勝男, 1993. Field note 各地から[ホシムクドリ]. はばたき, (251): 12, 日本野鳥の会神奈川支部.
- 平田寛重, 1994a. 文献による神奈川県の繁殖鳥類目録. BINOS, 1: 71-107, 日本野鳥の会神奈川支部.
- 平田寛重, 1994b. 神奈川県内におけるアマサギとヒクイナの繁殖例. 神奈川自然誌資料, (15): 47-48.
- 平塚市博物館, 1983. 平塚鳥類誌. 平塚市博物館. 120 pp.
- 飯村武, 1985. 三浦半島南部におけるサギ類の動態. 神奈川県立自然保護センター調査研究報告, (2): 7-14.
- 神奈川新聞社, 1994. 木の根本に巣. 神奈川新聞1994. 5. 9.
- 金井裕・磯辺清一, 1990. 東京湾岸におけるコアジサシ *Sterna albifrons* の繁殖コロニーの分布. Strix, 9: 177-190.
- 金井裕・磯辺清一・成末雅恵・桑原和之, 1991. 東京湾岸におけるコアジサシ *Sterna albifrons* の繁殖地の分布変化. Strix, 10: 263-267.
- 唐沢良子・竹内裕・沼田忠司・浜口哲一, 1993. 座間市の鳥類. 座間市の動物, 43-115, 座間市教育委員会.
- 小宮輝之, 1985. クロトキの野生復帰をめざして. 世界の動物1 分類と飼育コウノトリ目+フラミンゴ目, 122-123, 東京動物園協会.
- 桑原康裕, 1989. 鶴見川中流で観察された鳥類. 神奈川自然保全

- 研究会報告書, (8): 7-20.
- 松崎春信, 1993. Field note 各地から[多摩川河口にて]. はばたき, (259): 13, 日本野鳥の会神奈川支部.
- 松崎春信, 1995. 見つけた 多摩川河口にて. はばたき, (272): 12, 日本野鳥の会神奈川支部.
- 室伏友三, 1985. 箱根産鳥類目録. 箱根の文化財Vol. 20, 箱根町教育委員会. 42 pp.
- 室伏友三, 1988. 小田原市を中心とする西湖地区の鳥類誌. 小田原市郷土文化会館研究報告, (24): 41-67, 小田原市郷土文化会館.
- 中村一恵, 1974. 神奈川県鳥類誌2. 神奈川県立博物館, 38+16 pp.
- 中村一恵, 1979. 猿島の鳥類. 猿島の自然, 53-66, 観光資源保護財団.
- 中村一恵, 1984. 野外で見られる外国産飼い鳥. 決定版生物大図鑑鳥類, 276-280, 世界文化社.
- 日本鳥学会, 1974. 日本鳥類目録改訂第5版. 学習研究社. 120 pp.
- 日本野鳥の会, 1980. 鳥類繁殖地図調査1978. 日本野鳥の会. 560 pp.
- 日本野鳥の会神奈川支部, 1980. 神奈川の野鳥. 有隣堂. 261 pp.
- 日本野鳥の会神奈川支部, 1986. 神奈川の鳥1977-86. 日本野鳥の会神奈川支部. 218 pp.
- 日本野鳥の会神奈川支部, 1992. 神奈川の鳥1986-91. 日本野鳥の会神奈川支部. 20+440 pp.
- 日本野鳥の会神奈川支部鳥類目録編集委員会, 1994. 神奈川県内における希少な鳥類の写真記録1. BINOS, 1, 108-110. 日本野鳥の会神奈川支部.
- 相模川河口鳥類研究グループ, 1976. 相模川河口の鳥類-その1-. 相模川河口鳥類研究グループ.
- 相模川河口鳥類研究グループ, 1979. 相模川河口の鳥類-その2-. 相模川河口鳥類研究グループ.
- 相模川河口鳥類研究グループ, 1981. 相模川河口の鳥類-その3-. 相模川河口鳥類研究グループ.
- 相模川河口鳥類研究グループ, 1983. 相模川河口の鳥類-その4-. 相模川河口鳥類研究グループ.
- 相模川河口鳥類研究グループ, 1989. 相模川河口の鳥類-その5-. 相模川河口鳥類研究グループ.
- 相模原市教育研究所, 1982. 相模原市の自然環境調査-鳥類について-. 研究集録64集. 80 pp.
- 柴田敏隆, 1962. 小松ヶ池のいわゆるマガモについて. 横浜支部報, (56): 2, 日本野鳥の会横浜支部.
- 柴田敏隆, 1964. 丹沢山塊の鳥類. 丹沢大山学術調査報告書, 349-355. 神奈川県.
- 下島芳行, 1993. Field note 各地から[カパイロハッカ1]. はばたき, (254): 12, 日本野鳥の会神奈川支部.
- 杉坂学, 1992. Field note 各地から[多摩川河口にて]. はばたき, (244): 13, 日本野鳥の会神奈川支部.
- 高橋和也, 1990. 藤沢鳥類目録. 藤沢市教育実践記録集, 71-96, 藤沢市教育委員会.
- 竹内裕, 1993. 座間市新田宿のシギ・チドリ類. 自費出版. 29 pp.
- 植田睦之・遠藤孝一・東條一史・永石文明, 1991. オオタカ・ハイタカ・ツミ3種を比べる. 日本の生物5(3): 22-29.
- 渡辺央, 1972. 相模川におけるコアジサシの産卵と孵化について. 野鳥, 308: 41-47, 日本野鳥の会.
- 山口喜盛, 1991. 丹沢山地鳥類目録. 自然と文化, (14): 83-110, 平塚市博物館.
- 山口喜盛, 1994. 丹沢山地における鳥類の希少な繁殖例について. 神奈川自然誌資料, (15): 49-51.
- 山階芳麿, 1986. 世界鳥類和名辞典. 大学書林. 1140 pp.
- 「野鳥と多摩川」ガイドブック制作委員会, 1992. 粕江の自然野鳥と多摩川. 粕江市. 255 pp.
- 横須賀市自然博物館, 1991a. 三浦半島の野鳥. 横須賀市自然博物館. 51 pp.
- 横須賀市自然博物館, 1991b. 横須賀市自然博物館所蔵鳥類目録資料目録. 40 pp.

(平田寛重)

表10. 神奈川県産鳥類RD度一覧

科名	和名	学名	渡り	孵化	原産地	繁殖期ステータス	繁殖期RD度	非繁殖期ステータス	非繁殖期RD度	京浜	三浦	湘南	横浜	東北	西濃	丹沢	箱根
アビ科	ハシジロアビ	Gavia adamsii	A					T								※	
	オオハム	Gavia arctica	W					L		※	※					※	
	シロエリオオハム	Gavia pacifica	W					L		※	※						
	アビ	Gavia stellata	W					L		※	※					※	
カイツブリ科	ミミカイツブリ	Podiceps auritus	W					L	I	※	※	※	※	※	※		※
	カンムリカイツブリ	Podiceps cristatus	W					R	I	※	※	※	※	※	※	※	※
	アカエリカイツブリ	Podiceps grisegena	W					R	I	※	※	※	※	※	※	※	※
	ハジロカイツブリ	Podiceps nigricollis	W					R	J	※	※	※	※	※	※	※	※
	カイツブリ	Podiceps ruficollis	R			R	J	R	K	※	※	※	※	※	※	※	※
アネウドリ科	コアネウドリ	Diomedea immutabilis	A					T		※	※	※					
	クロアシアネウドリ	Diomedea nigripes	A					T				※					
ミズナギドリ科	アナドリ	Bulweria bulwerii	A					T						※			
	オオミズナギドリ	Calonectris leucomelas	S					R		※	※	※	※	※	※		
	フルマカモメ	Fulmarus gracialis	A					T		※	※						
	オオシロハラミズナギドリ	Pterodroma externa	A					T			※						
	シロハラミズナギドリ	Pterodroma hypoleuca	A					T		※	※	※					
	ヒメシロハラミズナギドリ	Pterodroma longirostris	A					T							※		
	ミナミオナガミズナギドリ	Puffinus bulleri	A					T	※								
	アカアシミズナギドリ	Puffinus carneipes	T					T			※						
	ハイロミズナギドリ	Puffinus griseus	T					L		※	※						
	ハシボソミズナギドリ	Puffinus tenuirostris	T					R		※	※	※	※	※	※		
ウミツバメ科	クロコシジロウミツバメ	Oceanodroma castro	A					T		※	※	※	※				
	ハイロウミツバメ	Oceanodroma furcata	A					T			※						
	コシジロウミツバメ	Oceanodroma leucorhoa	A					T		※	※	※	※				
	クロウミツバメ	Oceanodroma matsudairae	A					T			※						
	オーストンウミツバメ	Oceanodroma tristrami	A					T			※	※	※				
ネッタイチョウ科	アカネッタイチョウ	Phaethon rubricauda	A					T		※	※						
カツオドリ科	カツオドリ	Sula leucogaster	A					T		※							
	アカアシカツオドリ	Sula sula	A					T		※							
ウ科	カワウ	Phalacrocorax carbo	W					R	J	※	※	※	※	※	※	※	※
	ウミウ	Phalacrocorax filamentosus	W					R	G	※	※	※	※			※	
	ヒメウ	Phalacrocorax pelagicus	W					L	G	※	※	※	※			※	
グンカンドリ科	コグンカンドリ	Fregata ariel	A					T		※	※	※				※	
	オオグンカンドリ	Fregata minor	A					T		※							
サギ科	アサギ	Ardea cinerea	W					R	K	※	※	※	※	※	※	※	※
	ムラサキサギ	Ardea purpurea	A					T		※		※					
	アカシラサギ	Ardeola bacchus	A					T		※	※					※	
	サンカノゴイ	Botaurus stellaris	W					T								※	
	アマサギ	Bubulcus ibis	S			L	G			※	※	※	※	※	※	※	※
	ササゴイ	Butorides striatus	S			L	G			※	※	※	※	※	※	※	※
	ダイサギ	Egretta alba	R			L	G	R	J	※	※	※	※	※	※	※	※
	カラシラサギ	Egretta eulophotes	A					T		※	※	※					
	コサギ	Egretta garzetta	R			R	H	W	L	※	※	※	※	※	※	※	※
	チュウサギ	Egretta intermedia	S					L	J	※	※	※	※	※	※	※	
	クロサギ	Egretta sacra	R			L	D	L	J	※	※					※	
	ミゾゴイ	Gorsakius goisagi	S			L	E			※	※	※	※	※	※	※	※
	オオヨシゴイ	Ixobrychus eurhythmus	T					T		※	※	※	※	※	※	※	
	ヨシゴイ	Ixobrychus sinensis	S			L	E			※	※	※	※	※	※	※	※
	ゴイサギ	Nycticorax nycticorax	R			R	G	W	K	※	※	※	※	※	※	※	※
コウノトリ科	ナベコウ	Ciconia nigra	A					T		※							
トキ科	ヘラサギ	Platalea leucorodia	A					T			※						
	クロトキ	Threskiornis melanocephalus		※	As			T									
フラミンゴ科	オオフラミンゴ	Phoenicopterus sp.		※	As-Eu			T								※	
カモ科	オンドリ	Aix galericulata	SW			L	I*	R	J	※	※	※	※	※	※	※	※
	エフツボガン	Alopochen aegyptica		※	Af			T								※	
	オナガガモ	Anas acuta	W					R	K	※	※	※	※	※	※	※	※
	アメリカヒドリ	Anas americana	W					L	I	※	※	※				※	
	ハンビロガモ	Anas clypeata	W					R	K	※	※	※	※	※	※	※	
	コガモ	Anas crecca	W					W	L	※	※	※	※	※	※	※	※
	ヨシガモ	Anas falcata	W					R	J	※	※	※	※	※	※	※	
	トモエガモ	Anas formosa	W					L	I	※	※	※	※	※	※	※	※
	ヒドリガモ	Anas penelope	W					R	K	※	※	※	※	※	※	※	※
	マガモ	Anas platyrhynchos	W					W	L	※	※	※	※	※	※	※	※
	アヒル/ナキアヒル	Anas platyrhynchos		※	D		T	L		※	※	※	※	※	※	※	※

表10. (続き)

科名	和名	学名	渡り	孵化	原産地	繁殖期ステータス	繁殖期RD	非繁殖期ステータス	非繁殖期RD	京浜	三浦	湘南	関東	東北	西端	丹沢	海沿
チドリ科	シロチドリ	Charadrius alexandrinus	R			L	E	R	G	※	※	※	※	※	※		
	オオチドリ	Charadrius asiaticus	A					T		※							
	コチドリ	Charadrius dubius	S			R	G			※	※	※	※	※	※		
	ハジロコチドリ	Charadrius hiaticula	T					T		※	※	※					
	オオメダイチドリ	Charadrius leschenaultii	T					L	D	※	※	※			※		
	メダイチドリ	Charadrius mongolus	T					R	H	※	※	※	※	※	※		
	イカルチドリ	Charadrius placidus	R			L	G	R	J	※	※	※	※	※	※	※	※
	ケリ	Microsarcops cinereus	TW					L	G	※	※	※	※	※	※		
	ムナグロ	Pluvialis dominica	T					R	H	※	※	※	※	※	※		
	ダイゼン	Pluvialis squatarola	T					L	P	※	※	※	※	※	※		
	タザリ	Vanellus vanellus	W					R	G	※	※	※	※	※	※		
シギ科	キョウジョシギ	Arenaria interpres	T					R	G	※	※	※	※	※	※		
	ウスシギ	Calidris acuminata	T					L	P	※	※	※	※	※	※		
	ハマシギ	Calidris alpina	TW					R	H	※	※	※	※	※	※		
	ヒメウスシギ	Calidris bairdii	T					T		※							
	コオバシギ	Calidris canutus	T					L	D	※		※	※				
	サルハマシギ	Calidris ferruginea	T					L	D	※		※	※		※		
	ヒマハマシギ	Calidris mauri	A					T		※							
	アメリカウスシギ	Calidris melanotos	T					L	P	※		※	※				
	ヒバシギ	Calidris minutilla	T					L	P	※		※	※	※	※		
	トウネン	Calidris ruficollis	T					R	G	※	※	※	※	※	※		
	オジロトウネン	Calidris temminckii	T					L	P	※		※	※	※	※		
	オバシギ	Calidris tenuirostris	T					L	E	※	※	※	※	※	※		
	ミコシギ	Crocethia alba	TW					L	G	※	※	※			※		
	ヘラシギ	Eurynorhynchus pygmeus	A					T		※		※					
	タシギ	Gallinago gallinago	TW					R	H	※	※	※	※	※	※		※
	オオシギ	Gallinago hardwickii	T					R	P	※		※	※	※			※
	チュウシギ	Gallinago megala	T					T		※			※				
	キリアイ	Limicola falcinellus	T					L	E	※		※	※		※		
	アメリカオハシシギ	Limnodromus griseus	A					T							※		
	オハシシギ	Limnodromus scolopaceus	A					T		※		※			※		
	シベリアオハシシギ	Limnodromus semipalmatus	A					T		※							
	オオソリハシシギ	Limosa lapponica	T					R	P	※	※	※	※	※	※		
	オグロシギ	Limosa limosa	T					R	P	※	※	※	※	※	※		
	ダイシャクシギ	Numenius arquata	T					L	D	※	※	※	※	※	※		
	ホウロクシギ	Numenius madagascariensis	T					L	D	※		※	※		※		
	コシャクシギ	Numenius minutus	A					T				※					
	チュウシャクシギ	Numenius phaeopus	T					R	G	※	※	※	※	※	※		
	エリマキシギ	Philomachus pugnax	T					L	P	※		※	※	※	※		
	ヤマシギ	Scolopax rusticola	W					R	G	※	※	※	※	※	※	※	※
	キアシシギ	Tringa brevipes	T					R	H	※	※	※	※	※	※		
	ツルシギ	Tringa erythropus	T					L	P	※		※	※	※	※		
	コキアシシギ	Tringa flavipes	A					T		※							
	タカアシシギ	Tringa glareola	T					R	G	※	※	※	※	※	※		
	カラフトアアシシギ	Tringa guttifer	A					T		※							
	イソシギ	Tringa hypoleucos	R				R	G	R	K	※	※	※	※	※		
	メリケンキアシシギ	Tringa incana	T					L	I		※	※			※		
	アオアシシギ	Tringa nebularia	T					R	G	※	※	※	※	※	※		
	クサシギ	Tringa ochropus	TW					R	G	※	※	※	※	※	※		
	コアアシシギ	Tringa stagnatilis	T					L	D	※		※	※	※	※		
	アカアシシギ	Tringa totanus	T					L	D	※	※	※	※	※	※		
	ソリハシシギ	Xenus cinereus	T					R	G	※	※	※	※	※	※		
セイタカシギ科	セイタカシギ	Himantopus himantopus	A					L		※	※	※	※	※	※		
	オーストラリアセイタカシギ	Himantopus leucocephalus	A					T							※		
	ソリハシセイタカシギ	Recurvirostra avocetta	A					T				※					
ヒレアシシギ科	ハイロヒレアシシギ	Phalaropus fulicarius	T					T			※	※					
	アカエリヒレアシシギ	Phalaropus lobatus	T					R	E	※	※	※	※	※	※		※
ツバメチドリ科	ツバメチドリ	Glareola maldivarum	T					L		※	※	※	※	※	※		
トウゾクカモメ科	シロハラトウゾクカモメ	Stercorarius longicaudus	A					T		※		※					
	クロトウゾクカモメ	Stercorarius parasiticus	A					T				※					
	トウゾクカモメ	Stercorarius pomarinus	A					T				※		※			
	オオトウゾクカモメ	Stercorarius skua	A					T				※					
カモメ科	セグロカモメ	Larus argentatus	W					R	K	※	※	※	※	※	※		
	カモメ	Larus canus	W					L	J	※	※	※	※	※	※		

表10. (続き)

科名	和名	学名	渡り	孵化	原産地	繁殖期ステータス	繁殖期RD度	非繁殖期ステータス	非繁殖期RD度	京浜	三浦	湘南	関東	東北	西濃	丹沢	箱根
カモ科	ウミネコ	<i>Larus crassirostris</i>	R					R	K	※	※	※	※	※	※		
	ワシカモメ	<i>Larus glaucescens</i>	W					L	I	※	※	※			※		
	シロカモメ	<i>Larus hyperboreus</i>	W					L	I	※	※	※			※		
	ボナバルトカモメ	<i>Larus philadelphia</i>	A					T		※							
	ゴビズキンカモメ	<i>Larus relictus</i>	A					T				※					
	ユリカモメ	<i>Larus ridibundus</i>	W					R	L	※	※	※	※	※	※		
	ズグロカモメ	<i>Larus saundersi</i>	A					T		※		※			※		
	オオセグロカモメ	<i>Larus schistisagus</i>	W					R	K	※	※	※	※	※	※		
	ミソビカモメ	<i>Larus tridactylus</i>	W					L	I	※	※	※			※		
	コアジサシ	<i>Sterna albifrons</i>	S			L	P			※	※	※	※	※	※		
	コシジロアジサシ	<i>Sterna aleutica</i>	A					T				※				※	
	オニアジサシ	<i>Sterna caspia</i>	A					T		※							
	ベニアジサシ	<i>Sterna dougallii</i>	A					T		※		※					
	セグロアジサシ	<i>Sterna fuscata</i>	A					T			※	※		※			
	アジサシ	<i>Sterna hirundo</i>	T					L		※	※	※	※	※	※		
	クロハラアジサシ	<i>Sterna hybrida</i>	A					T		※		※					
	ハシグロクロハラアジサシ	<i>Sterna leucoptera</i>	A					L		※		※			※		
	ハシブトアジサシ	<i>Sterna nigra</i>	A					T			※	※					
	ハシブトアジサシ	<i>Sterna nilotica</i>	A					T		※		※					
	キョウアジサシ	<i>Sterna paradisaea</i>	A					T		※							
ウミスズメ科	マダラウミスズメ	<i>Brachyramphus marmoratus</i>	W					L			※	※					
	ケイマフリ	<i>Cephus carbo</i>	W					L			※						
	ウミバト	<i>Cephus columba</i>	A					T			※						
	ウトウ	<i>Cerorhinca monocerata</i>	A					L			※						
	ウミスズメ	<i>Synthliboramphus antiquus</i>	W					L			※	※			※		
	カンムリウミスズメ	<i>Synthliboramphus wumizusume</i>	A					T			※	※			※		
	ハシブトウミガラス	<i>Uria lomvia</i>	A					T							※		
ハト科	カラスバト	<i>Columba janthina</i>				E	A	E	A		※						
	ドバト	<i>Columba livia</i>		※	D	W		W		※	※	※	※	※	※	※	
	ウスユキバト	<i>Geopelia cuneata</i>		※	Au			T		※							
	アオバト	<i>Sphenurus sieboldii</i>	S			R	J			※	※	※	※	※	※	※	※
	キジバト	<i>Streptopelia orientalis</i>	R			W	L	W	L	※	※	※	※	※	※	※	※
オウム科	キバタン	<i>Cactula galerita</i>		※	Au			T		※							
	オカメインコ	<i>Nymphicus hollandicus</i>		※	Au			T		※			※				
インコ科	オカメインコ	<i>Agopornis lilianae</i>		※	Af			T				※					
	クロオカメインコ	<i>Agopornis nigrigenis</i>		※	Af			T				※					
	ブルーオカメインコ	<i>Agopornis personata</i>		※	Af			T				※					
	コザクラインコ	<i>Agopornis roseicollis</i>		※	Af			T		※							
	アオオカメインコ	<i>Amazonia aestiva</i>		※	SA			T			※						
	セキセイインコ	<i>Melopsittacus undulatus</i>		※	Au			L		※	※	※	※	※			
	オキナインコ	<i>Myiopsitta monachus</i>		※	SA			T				※					
	ダルマインコ	<i>Psittacula alexandri</i>		※	As			T				※					
	オオキンセインコ	<i>Psittacula eupatria</i>		※	As			T		※							
カッコウ科	ワカケキンセインコ	<i>Psittacula kurameri manillensis</i>		※	As			L		※	※	※	※				
	カッコウ	<i>Cuculus canorus</i>	S			R	J			※	※	※	※	※	※	※	※
	ジュウイチ	<i>Cuculus fugax</i>	S			R	J			※	※	※	※	※	※	※	※
	ホトトギス	<i>Cuculus poliocephalus</i>	S			R	J			※	※	※	※	※	※	※	※
	ツツドリ	<i>Cuculus saturatus</i>	S			R	J			※	※	※	※	※	※	※	※
フクロウ科	コミミズク	<i>Asio flammeus</i>	W					L	D	※		※	※		※		
	トラフズク	<i>Asio otus</i>	W					L	D	※		※				※	
	アオバズク	<i>Ninox scutulata</i>	S			R	H			※	※	※	※	※	※	※	※
	オオコノハズク	<i>Otus bakkamoena</i>	W					L	I		※	※	※	※	※	※	※
	コノハズク	<i>Otus scops</i>	S					L	E			※	※	※	※	※	※
	フクロウ	<i>Strix uralensis</i>	R			R	H	R	H	※	※	※	※	※	※	※	※
ヨタカ科	ヨタカ	<i>Caprimulgus indicus</i>	S			L	G			※	※	※	※	※	※	※	※
アマツバメ科	ヒメアマツバメ	<i>Apus affinis</i>	R			R	J	R	J	※	※	※	※	※	※	※	※
	アマツバメ	<i>Apus pacificus</i>	T					R		※	※	※	※	※	※	※	※
	ハリオアマツバメ	<i>Chaetura caudacuta</i>	T					L		※	※	※	※	※	※	※	※
カワセミ科	カワセミ	<i>Alcedo atthis</i>	R			R	K	R	K	※	※	※	※	※	※	※	※
	ヤマセミ	<i>Ceryle lugubris</i>	R			R	J			※							
	アカショウビン	<i>Halcyon coromanda</i>	S			L	I	*		※	※	※	※	※	※	※	※
フタホシウ科	フタホシウ	<i>Eurystomus orientalis</i>	S			L	D			※	※	※	※	※	※	※	※
ヤツガシラ科	ヤツガシラ	<i>Upupa epops</i>	A					T		※		※		※			
キツツキ科	コガラ	<i>Dendrocopos kizuki</i>	R			W?	L	W	L	※	※	※	※	※	※	※	※

表10. (続き)

科名	和名	学名	渡り	偏化	原産地	繁殖期ステータス	繁殖期R D度	非繁殖期ステータス	非繁殖期RD度	京浜	三浦	湘南	関東	東北	西海	丹沢	箱根
ヒタキ科	アカハラ	<i>Turdus chrysolaus</i>	SW			R	J	R	K	*	*	*	*	*	*	*	*
	トラツグミ	<i>Turdus dauma</i>	SW			R	J	R	K	*	*	*	*	*	*	*	*
	ツグミ	<i>Turdus naumanni</i>	W					W	L	*	*	*	*	*	*	*	*
	マミチャジナイ	<i>Turdus obscurus</i>	T					L	*	*	*	*	*	*	*	*	*
	シロハラ	<i>Turdus pallidus</i>	W					R	K	*	*	*	*	*	*	*	*
	ウタツグミ	<i>Turdus philomelos</i>	A					T	*								
	ノハラツグミ	<i>Turdus pilaris</i>	A					T				*					
エナガ科	エナガ	<i>Aegithalos caudatus</i>	S			R	J			*		*	*	*	*	*	*
	ツリスガラ	<i>Remiz pendulinus</i>	R			R	K	W	K	*	*	*	*	*	*	*	*
シジュウカラ科	ヒガラ	<i>Parus ater</i>	W					L	*	*	*						
	シジュウカラ	<i>Parus major</i>	R			R	J	R	J	*	*	*	*	*	*	*	*
	コガラ	<i>Parus montanus</i>	R			R	J	R	J	*	*	*	*	*	*	*	*
	ヤマガラ	<i>Parus varius</i>	R			R	K	R	K	*	*	*	*	*	*	*	*
ゴジュウカラ科	ゴジュウカラ	<i>Sitta europaea</i>	R			R	J	R	J	*	*	*	*	*	*	*	*
キバシリ科	キバシリ	<i>Certhia familiaris</i>	A					T									*
ノジロ科	ノジロ	<i>Zosterops japonica</i>	R			W	L	W	L	*	*	*	*	*	*	*	*
ホオジロ科	ツメナガホオジロ	<i>Calcarius lapponicus</i>	A					T			*						
	チャキンチョウ	<i>Emberiza bruniceps</i>		*	As			T				*					
	ホオジロ	<i>Emberiza cioides</i>	R			W	L	W	L	*	*	*	*	*	*	*	*
	ミヤマホオジロ	<i>Emberiza elegans</i>	W					R	J	*	*	*	*	*	*	*	*
	ホオアカ	<i>Emberiza fucata</i>	SW			L	H	R	J	*	*	*	*	*	*	*	*
	ズグロチャキンチョウ	<i>Emberiza melanocephala</i>		*	As			T			*						
	シベリアジュリン	<i>Emberiza pallasi</i>	A					T	*								
	カシラダカ	<i>Emberiza rustica</i>	W					W	L	*	*	*	*	*	*	*	*
	オオジュリン	<i>Emberiza schoeniclus</i>	W					R	G	*	*	*	*	*	*	*	*
	アオジ	<i>Emberiza spodocephala</i>	SW			L	I*	W	L	*	*	*	*	*	*	*	*
	ノゾコ	<i>Emberiza sulphurata</i>	S			L	I*			*						*	*
	クロジ	<i>Emberiza variabilis</i>	W					R	K	*	*	*	*	*	*	*	*
	コジュリン	<i>Emberiza yessoensis</i>	W					T	*				*				
	コウカンチョウ	<i>Paroaria cornata</i>		*	SA			T		*	*				*		
アトリ科	ベニヒワ	<i>Acanthis flammea</i>	W					T			*	*	*	*	*	*	*
	カラヒワ	<i>Carduelis sinica</i>	R			W	L	W	L	*	*	*	*	*	*	*	*
	マヒワ	<i>Carduelis spinus</i>	W					R	J	*	*	*	*	*	*	*	*
	オオマシコ	<i>Carpodacus roseus</i>	W					L	I	*		*	*	*	*	*	*
	シメ	<i>Coccothraustes coccothraustes</i>	W					R	K	*	*	*	*	*	*	*	*
	コイカル	<i>Eophona migratoria</i>	T					L	I	*		*	*	*	*	*	*
	イカル	<i>Eophona personata</i>	R			R	J	R	J	*	*	*	*	*	*	*	*
	アトリ	<i>Fringilla montifringilla</i>	W					R	J	*	*	*	*	*	*	*	*
	ハギマシコ	<i>Leucosticte arctoa</i>	W					L	I		*	*	*	*	*	*	*
	ウソ	<i>Pyrrhula pyrrhula</i>	W					R	J	*	*	*	*	*	*	*	*
	カナリア	<i>Serinus canaria</i>		*	Af			T		*					*		
	キヌカカナリア	<i>Serinus mozambicus</i>		*	Af			T	*								
	ベニマシコ	<i>Uragus sibiricus</i>	W					R	J	*		*	*	*	*	*	*
カエデチョウ科	ベニスズメ	<i>Amandava amandava</i>		*	As			L	*		*	*	*	*	*	*	*
	ヘキチョウ	<i>Lonchura maja</i>		*	As			T	*	*	*	*					
	ギンバラ/キンバラ	<i>Lonchura malacca malacca</i>		*	As			T			*		*	*			
	シマキンバラ	<i>Lonchura punctulata topera</i>		*	As			T			*	*	*	*			
	ブンチョウ	<i>Padda oryzivora</i>		*	As			T	*		*	*	*	*			
	キンカチョウ	<i>Poephila guttata</i>		*	Au			T			*						
ハタオリドリ科	オウゴンチョウ	<i>Euplectes afer</i>		*	Af			T			*	*					
	ベニビタイキンランチョウ	<i>Euplectes horodeaceus</i>		*	Af			T			*						
	キンランチョウ	<i>Euplectes orix franciscana</i>		*	Af			T	*		*	*	*	*			
	スズメ	<i>Passer montanus</i>	R			W	L	W	L	*	*	*	*	*	*	*	*
	ニョウナイスズメ	<i>Passer rutilans</i>	W					L	D	*	*	*	*	*	*	*	*
	ズグロウロコハタオリ	<i>Ploceus cucullatus</i>		*				T	*								
	ズアカコウヨウチョウ	<i>Quela erythropus</i>		*	Af			T			*						
	チンニンチョウ	<i>Vidua macroura</i>		*	Af			T	*		*	*	*				
	ネリオウジャク	<i>Vidua paradisaea</i>		*	Af			T	*	*							
ムクドリ科	ハッカチョウ	<i>Acridotheres cristatellus</i>		*	As	L		L	*	*	*						
	ハイロハッカ(キホホハッカ)	<i>Acridotheres ginginianus</i>		*	As			T			*						
	カバロハッカ	<i>Acridotheres tristis</i>		*	As			T	*								
	キガシラムクドリ	<i>Ampeliceps coronatus</i>		*	As			T	*								
	キョウカンチョウ	<i>Gracula religiosa</i>		*	As			T		*							

表10. (続き)

科名	和名	学名	渡り	帰化	産地	繁殖期ステータス	繁殖期RD度	非繁殖期ステータス	非繁殖期RD度	京浜	三浦	湘南	関東	東北	西海	丹波	指紋
ムクドリ科	ムクドリ	<i>Sturnus cineraceus</i>	R			W	L	W	L	※	※	※	※	※	※	※	※
	コムクドリ	<i>Sturnus philippensis</i>	T					L		※	※	※	※	※	※		※
	カラムクドリ	<i>Sturnus sinensis</i>	A					T				※			※		
	ホシムクドリ	<i>Sturnus vulgaris</i>	A					T		※							
カラス科	ハシボソガラス	<i>Corvus corone</i>	R			W	L	W	L	※	※	※	※	※	※	※	※
	ハシブトガラス	<i>Corvus macrorhynchos</i>	R			W	L	W	L	※	※	※	※	※	※	※	※
	オナガ	<i>Cyanopica cyana</i>	R			R	L	R	L	※	※	※	※	※	※		※
	カケス	<i>Garrulus glandarius</i>	R			R	J	R	K	※	※	※	※	※	※	※	※
	ホシガラス	<i>Nucifraga caryocatactes</i>	W					T				※		※		※	
	カササギ	<i>Pica pica</i>		※	As-Eu			T		※	※	※					